海外だより

ケンブリッヂ大学留学報告

佐藤　馨*

はじめに

1986年9月から2年間，イギリス・ケンブリッヂ大学のMaterials Science & Metallurgy学科に大学院生として留学する機会を得た．斜陽の国イギリスから，もはや学ぶものなどないと断言する人もいたが，日本がアメリカ一辺倒であることに若干の反発を感じていたことと，オリジナルな基礎研究では，今でもイギリスはトップレベルにあることからこの国を留学先に選んだ．私が専門とする電子顕微鏡の分野では，依然としてイギリスが先駆者としての役割を担っている上に，世界各地で活躍する多くの研究者がこの地で教育を受けている．この伝統が今でも多くの研究者をイギリス，とりわけケンブリッヂ，オックスフォードに集める魅力となっているようだ．世界の知の中心地の一つに身を置くことに大きな期待を持ってケンブリッヂへと旅立った．

College制度

ロンドンから列車で北へ約1時間のところにケンブリッヂがある．車窓からの田園風景，町並みが美しい．ケンブリッヂは大学の中に町があるという言い方が適当な小都市である．市内にはUniversityの建物と約30のCollegeが点在しており，ケンブリッヂ大学はどこかと尋ねられても答えようがない．ケンブリッヂ，オックスフォード両大学を世界でもユニークな大学としているのがCollege（日本ではしばしば学寮と訳される）制度である．Collegeとは何かを一言で説明するのは難しい．Collegeは生活の場すなわち寝食の場としての寮であり，一般教養および一部専門教育の場でもある．筆者は大学院生としてTrinity Hall Collegeに“入学”した．このCollegeは1350年に法律家を養成するために創立されたが，現在は他の専門を持った研究者，学生も多い．毎週開かれるCollegeのディナーにガウンを着て（ガウンの下はトレーナーにジーンズで構わない！）出かけると，考古学，歴史学，経済学など自分と異なる専攻を持ったCollegeのメンバー達と実に幅広い話題で会話がはずむ．社会に出てから専門知識同様，いやそれ以上に役立つ訓練であると実感した．

Collegeが持つ機能として感心したのはSupervision制度である．大学院生クラスの学生が2～3名の学部生の“個人教師”として付く．学部生はすさまじいスピードで進む授業内容を理解するために，先輩から個人指導を受けることができる．一方で大学院生は教えることを通じて自ら学べるほかに，Collegeから報酬が入るといった具合で，“一石三鳥”のシステムだと言える．

ケンブリッヂ市にとって，13世紀までさかのぼるCollegeの古い建築物は重要な観光資源である．特に街の中心を流れるCam川沿いに並ぶKings, Trinity, St.JonesなどのCollegeは観光の目玉になっている．Collegeが美しいのはそれらが歴史の遺物なのではなく，現在も人々によってその営みが続けられているからであろう．

専門教育の場：Department

専門教育は主としてDepartment（学科）で行われる．学科にはさまざまなCollegeからの学生の他に，Collegeに所属していない海外からの客員研究員がいる．日米の大学と異なり教授は稀少価値である．筆者がいたMaterials Science学科では教授はただ一人で，学科長も務められていた．Reader, Lecturer等，教授に次ぐ地位の研究者もそれぞれ自分の研究グループを持っている点では日本の大学の講座制と類似している．

イギリスの大学教育の課程は短く，学部3年，大学院3年の計6年である．日本の大学にある教養課程に相当するものがなく，学生達は少ない科目に絞って短期間で専門を深める．大学院の学生も，皆で集まって輪講をやり一冊の本を読み上げたりしない．各自が論文をまとめる上で必要と感じる部分を徹底的に学習し，不明な点は指導教官や先輩と議論する．講義や宿題が厳しいアメリカの大学と比べてかなりの放任主義であり，日本と比較すると徹底した個人主義である．このやり方が研究者を若いうちから自立させ，個性的にしているように思う．見方によってはたいへん厳しいシステムで，自主的に研究を進められない者は淘汰されてしまう．大学院3年の間に義務付けられているのは，各自のThesisの骨組みとも言える1st year reportの提出及び口頭試問，中間段階での研究成果を口頭発表する学科セミナーぐらいのもので，講義の聴講は自主性に任せられる．最終的にまとめあげるThesisが各自が学んだもの，研究したものの成果として評価されるのである．こう書くとイギリスの学生は専門バカであるように聞こえるかもしれないが，前述のCollegeでの交流が幅広い知識を身につける助けとなっている．

研究活動は確かに個人ベースで進められるが，彼らはお互いの情報交換の面でも抜け目がない．午前のコーヒー，午後の紅茶の時間になると，学科のメンバーは喫茶室に集まり，思い思いのグループを構成してお茶を飲みながら議論する．リラックスした雰囲気の中で，目上だとか目下だという気を使わずに気さくに研究上の問題点を話しあう．イギリス人の性質からか，ややメンバーが固定する傾向があり，十分に知のスクランブルがなされていたとは言い難いが，少なくともその気さえあれば，短時間で有益な議論ができる場が提供されていた点は評価に値すると思う．

* NKK鉄鋼研究所　Ph. D.

イギリスの大学の問題点

イギリスの大学は財政難に苦しんでいる．ケンブリッヂは最も恵まれた環境にあるらしいが，日本の大学や企業と比べて実験装置の質では見劣りがする（それでもなお大きな研究成果が出ていることには驚く）．政府からの援助が足りない分を，企業をスポンサーとする研究費で補おうとするために，企業受けのする研究テーマが増えてきたという．伝統的に強かった基礎研究が弱体化するのではないかと他人事ながら心配になった．

このような状況化で頭脳流出も大きな問題点に思えた．イギリスの大学のポスト不足から，多くの有能な研究者がアメリカ，オーストラリアといった英語圏に流出している．この責任の一端はイギリスの企業にもある．企業の研究所は学生達にとって魅力がなく，そのためにPh.Dを取った後，ロンドンのCITYの金融界に職を得る理科系の学生が増加している．

イギリスの個人主義は多くの個性的なハイテク・ベンチャー企業を生み出した．残念なことに，彼らは個性的であるがゆえに，規模を拡大できる時期になると自己分裂するものが多いと聞く．個性尊重が叫ばれている日本と逆の問題をイギリスはかかえているようだ．

イギリス生活雑感

イギリス人をつめたいとか偽善的だとか言う人がいる．一見すると彼らはつめたいようにも見えるが，むしろ彼らは控え目であり，他人への干渉を極端に嫌っているだけなのに気づく．実際，イギリス人の友人から「実験で少し困っていたようだったけど，干渉したくなかったので手を貸さなかった．」と言われたときに，彼らの本質の一端を見たように思った．助けを求めれば彼らはとことん頼りになる．しかし助けを求められないのに手を貸すのを彼らはいさぎよしとしないのである．

さらに日本と比べて特徴的なのはイギリス人の生活が質素である点だ．日本では今まさに物があふれている．イギリス人は，日本だったらとっくに粗大ゴミになっている自転車に乗り，中古品もリサイクルしながらとことん使いこむ．次々と出てくる新製品にほんろうされることなく，自分にとって本当に必要なものだけを買う姿勢には学ぶものがあった．残念なことはこの美徳が年々薄れはじめていることである．

イギリス人の日本に対する関心も高まっている．工業製品のみならず文化面の理解を深めようとしており，Judo, Karateはもちろん Tofu, Futon, Bonsai 等も今や立派な国際語である．Matsui やSaishoといった日本的響きを持った商標で人々の気を引く家電メーカーがあるのにはいささか驚いた．

全般的には，イギリスは成熟した大人社会，性善説の国という印象を持ったが，サッカーファンの不祥事や事故をみるにつけ，やはり，この国にも病める面があるのだと再認識した．ケンブリッヂがイギリスの中でも特別な町であることを忘れてはならないだろう．

まとめ

2年間の留学生活を通じて，専門分野の研鑽はもちろん，イギリス人の研究の進め方，ものの考え方に接することができたことは有意義であった．彼らが先人達の積み上げてきた学問体系に対する深い理解と信頼から新たな一歩を積み上げようとする姿に素直に感動すると共に，その積み重ねこそが伝統の力なのだと実感した．世界的な知の中心地において，世界各国から集まった多くの研究者と友人になれたのも大きな財産である．

日本は世界一の工業国などと言われているが，まだまだ西欧社会から学びとらなければならないことが多い．日本の国際化が叫ばれているが，語学力を大きな障害としてその道のりは険しく，目標とするレベルに到達するのに，最底でも2～3世代を要するであろう．留学生を送り出すと同時に企業でも留学生を受け入れる，といった草の根レベルでの努力が，今後ますます重要であると考える．